

熊津都督府始末

高 丹丹

1. はじめに

本報告は、私の卒業論文の一部を整理して、『北大史学』第13期(2008)に発表した論文の内容の一部を補充したものである。この論文は王文度、劉仁願、劉仁軌、扶餘隆など熊津都督府の長官を手がかりとし、都督府が成立した顯慶五年(660)から儀鳳元年(676)の建安故城に移転したまでの間、その発展した過程と関連の問題を検討している。主たる内容は次の三つである。

- 一、熊津都督府の性格の変化について。
- 二、唐朝の百済に対する処置の態度と高句麗に対する戦略の変化について。
- 三、唐・新羅戦争勃発を招いた直接の原因について。

熊津都督府について、従来の研究では、朝鮮半島と羈縻府州などに関することを論じる時に言及されている。熊津都督府は朝鮮半島情勢の変化の過程において重要な位置を占め、特に唐と新羅の関係に影響があったことは認識されていたが、系統的な研究がなかつた。例えば、劉統は、熊津州が表面的な羈縻都督府、実際の唐朝の百済の軍事駐屯地であり、この統治が強固ではなかつた、と論じた。また、彼は熊津都督府の治下諸州の一部について考証している¹。彼は熊津都督府の特殊性に注目したが、その存在の時間と性格の判定についてはあやふやである。韓昇は、百済を平定した後、その最高の統治機構が熊津都督府であり、唐朝は一定程度の軍事占領を実行したが、百済の叛乱から、唐朝がその直接的な監護の政策を捨て、自治に移行した、と論じた²。拜根興は、熊津都督府は唐朝が半島に羈縻体制を建てた措置の一つである、と論じた³。また、他の研究者の関連の著作にも、熊津都督府に関する議論も少なからずあった⁴。

本報告では熊津都督を考察する中で、熊津都督府の性格の変化を検討してみたいと思う。

2. 羈縻府から軍事駐屯地まで—劉仁願を中心として

2.1 熊津都督府の初置

2.1.1 唐朝が百済に熊津等五つの都督府を置く

【史料一】『舊唐書』卷四高宗本紀：

(顯慶五年)八月庚辰，蘇定方等討平百濟，面縛其王扶餘義慈。國分為五部，郡三十七，城二百，戸七十六萬，以其地分置熊津等五都督府。

【史料二】『資治通鑑』卷二〇〇高宗顯慶五年八月「蘇定方引兵自成山濟海」：

百濟故有五部，分統三十七郡、二百城、七十六

萬戸，詔以其地置熊津等五都督府，以其酋長為都督、刺史。

【史料三】『通典』卷一八五邊防一：

顯慶五年，遣蘇定方討平之。舊有五部，分統三十七郡、二百城、七十六萬戸，至是以其地分置熊津、馬韓、東明等五都督府，仍以其酋長為都督府刺史。

【史料四】『唐會要』卷九五百濟：

其國分為五部，統郡三十七、城二百、戸七十六萬。至是，以其地置熊津、馬韓、東明、金漣、德安等五都督，各統州縣，立其酋長為都督、刺史、縣令，命左衛郎將王文度為都統，總兵以鎮之。

【史料五】『新唐書』卷二二〇百濟伝：

(顯慶五年)定方執義慈、隆及小王孝演、酋長五十八人送京師，平其國五部、三十七郡、二百城、戸七十六萬。乃析置熊津、馬韓、東明、金漣、德安五都督府，擢酋長治之，……

【史料六】『全唐文』卷二〇〇賀遂亮「大唐平百濟国碑銘」：

凡置五都督，卅七州三百五十縣，戸廿四萬，口六百廿萬。各齊編戸，咸變夷風。

【史料一】—【史料六】には、顯慶五年(660)、蘇定方が百済を平定し、百済を五部に分けて、郡が三十七、城が二百、戸が七十六万あり、唐朝がその地に熊津等五つの都督府を置き、その酋長を都督、刺史としたことが明らかである。

2.1.2 唐の羈縻政策について

『新唐書』卷四三下地理七下羈縻州：

唐興，初未暇於四夷，自太宗平突厥，西北諸蕃及蠻夷稍稍內屬，即其部落列置州縣。其大者為都督府，以其首領為都督、刺史，皆得世襲。雖貢賦版籍，多不上戸部，然聲教所暨，皆邊州都督、都護所領，著於令式。今錄招降開置之目，以見其盛。其後或臣或叛，經制不一，不能詳見。……大凡府州八百五十六，號為羈縻云。

これによって、唐代の羈縻政策は二つの特徴があることが分かる。

- 1、対象は内附の少数民族で、その大きいものは都督府を置き、小さいものは州を置く。
- 2、都督と刺史等は、部落の酋長が担任し、世襲である。

唐代の羈縻府について研究は劉統の『唐代羈縻府州研究』(西安：西北大學出版社、1998年)を参考する。

これらの史料によれば、唐朝が百済に建てた五つの都督府の性格は、当地の酋長が都督を担任したことから、羈縻府である。

2.2 劉仁願の官職の変化

唐朝はまず王文度を百濟留守軍の長官に任命したが、彼は正式に職につく前に病気のために卒した。そのため、劉仁願がその職を引き継いだ。

中国の研究者、拜根興は初期百濟留守軍の劉仁願の地位を考証した。龍朔三年(663)十一月の前、すなわち唐の百濟留守軍の初期段階に、留守の将領であった劉仁願の実際の職務は熊津都督府の都督であり、留守軍と熊津都督府の最高の長官であったと考えた。

しかし、拜根興氏は顯慶五年(660)から龍朔三年(663)において、劉仁願の官職が変化することに注意しなかった。これは唐朝が朝鮮半島に対する戦略を調整したことの反映であると思う。

【史料七】『全唐文』卷九九〇「唐劉仁願紀功碑」：(顯慶)五年授岨夷道行軍子總管，隨邢國公蘇定方破百濟，執其王扶餘義慈並太子隆及佐口口率以下七百餘人。……合境遺黎，安堵如舊。設官分職，各有司存。即以君為都護，兼知留鎮。

【史料八】『三國史記』卷七新羅本紀七新羅文武王「答薛仁貴書」：

都護劉仁願遠鎮孤城，四面皆賊，恒被百濟侵圍，常蒙新羅解救。

【史料九】『資治通鑑』卷二〇〇高宗龍朔元年(661)三月「初、蘇定方既平百濟」：

文度濟海而卒，百濟僧道琛、故將福信聚衆據留城，迎故王子豐於倭國而立之，引兵圍仁願於府城。詔起劉仁軌檢校帶方州刺史，將王文度之衆，便道發新羅兵以救仁願。……百濟立兩柵於熊津江口，仁軌與新羅兵合擊，破之，殺溺死者萬餘人。道琛乃釋府城之圍，退保存城。

【史料十】『資治通鑑』卷二〇〇：

(龍朔二年秋七月)丁巳，熊津都督劉仁願、帶方州刺史劉仁軌大破百濟於熊津之東，拔真峴城。

【史料十一】『冊府元龜』卷九八六「外臣部 征討」五：

(龍朔二年)七月，熊津都督劉仁願、帶方州刺史劉仁軌等率留鎮之兵及新羅之兵大破百濟餘賊於熊津之東，拔其真峴城，斬首八百級。

【史料十二】『冊府元龜』卷三六六「將帥部 機略」六：

劉仁願，龍朔中爲熊津都督，與帶方州刺史劉仁軌大破百濟餘賊於熊津之東。

【史料十三】『冊府元龜』卷三六六「將帥部 機略」六：

劉仁軌，龍朔三年爲帶方州刺史，與熊津道行軍總管·右威衛將軍孫仁師、熊津都督劉仁願大破百濟餘衆，及賊於白江，拔其周留城，百濟僞王扶餘豐走投高麗。

【史料十四】『冊府元龜』卷四〇五「將帥部 識略」四：

劉仁軌爲帶方州刺史，與熊津道行軍總管孫仁師、都督劉仁願大破百濟，唯賊帥遲受信據任存城不降。

【史料十五】『冊府元龜』卷四一三「將帥部 薦賢」：劉仁願爲熊津都督，既破百濟餘衆，仁願至京師，高宗謂曰：「……」

【史料七】、【史料八】には、劉仁願の官職は都護とある。【史料七】の言及したことは王文度が卒した後の事とすべきである。【史料九】によって、【史料八】の「答薛仁貴書」に記載されたことは龍朔元年の事と推測される。

【史料十】—【史料十五】は劉仁願を熊津都督とした記載である。【史料十】【史料十一】には龍朔二年(662)七月のことを記載したことは明らかである。

【史料十二】には時間が龍朔中のことで、事件が【史料十】【史料十一】と一致するので、龍朔二年七月のこととすべきである。【史料十三】【史料十四】【史料十五】は全て龍朔三年以降のことである。

これによって、劉仁願が熊津都督になったことは龍朔二年七月以降であり、これ以前は都護であったことがわかる。この変化は当時の朝鮮半島の情勢と密接な関係にある。

2.3 羈糜府から軍事駐屯地へ

唐朝は百濟を滅ぼした後、高句麗を征討することを準備していた。

【史料十六】『資治通鑑』卷二〇〇高宗顯慶五年(660)十二月壬午：

壬午，以左驍衛大將軍契苾何力爲涇江道行軍大總管，左武衛大將軍蘇定方爲遼東道行軍大總管，左驍衛將軍劉伯英爲平壤道行軍大總管，蒲州刺史程名振爲鏐方道總管，將兵分道擊高麗。

【史料十七】『資治通鑑』卷二〇〇高宗龍朔元年(661)春正月：

春，正月，乙卯，募河南北、淮南六十七州兵，得四萬四千餘人，詣平壤、鏐方行營。戊午，以鴻臚卿蕭嗣業爲扶餘道行軍總管，帥回紇等諸部兵詣平壤。

【史料十六】、【史料十七】に見えるように、主な部隊は北部戦線から出撃する配置になっていた。そのため、唐朝の百濟への出兵は、最初から南部戦線を考えたものではなく、新羅の要望に応えたもので、同時に高句麗への援助を断ったことで、その勢力を瓦解させようとしたのかもしれない。そのため、唐朝は高句麗での作戦が失敗し、鉄勒が唐の軍力を牽制し、百濟の情勢が危急の時に、留守軍を新羅へ撤退すること、あるいは中国へ撤兵すべきという意見があった。

【史料十八】『資治通鑑』卷二〇〇高宗龍朔二年(662)七月丁巳：

初，仁願、仁軌等屯熊津城，上與之敕書，以「平壤軍回，一城不可獨固，宜拔就新羅。若金法敏藉卿留鎮，宜且停彼；若其不須，即宜泛海還也。」

しかし、百濟の前線にいた劉仁軌には情勢について、もっとはっきりとした認識があった。高宗の二つ意見に対して、留守軍が全滅の危険に直面したとしても、かたく守り、変化を観察し、時機を待って

いたほうがよいと答えている。

【史料十九】『資治通鑑』卷二〇〇高宗龍朔二年秋七月「初、仁願、仁軌等屯熊津城」：

仁軌曰：「……主上欲滅高麗，故先誅百濟，留兵守之，制其心腹；……今平壤之軍既還，熊津又拔，則百濟餘燼，不日更興，高麗逋寇，何時可滅！且今以一城之地居敵中央，苟或動足，即為擒虜，縱入新羅，亦為羈客，脫不如意，悔不可追。況福信凶悖殘虐，君臣猜離，行相屠戮；正宜堅守觀變，乘便取之，不可動也。」

この分析によって、高宗は百濟の重要な戦略意義に注目し、戦略を変えたのかもしれない。そして、龍朔二年の三、四月において、鉄勒の叛乱はすでに一区切りがついたため、唐朝は百濟方面の支援が可能になった。そのために百濟と高句麗を包括的に考えることが出来るようになったのであろう。熊津都督府だけが唐朝のコントロールの下になった場合に、高句麗を攻めるため、劉仁願が都護から熊津都督になった。これは、熊津都督府が羈糜の性格を変え、唐朝が百濟に置いた軍事駐屯地になったといえるであろう。言い換えれば、南部戦線を開拓したということである。

3. 軍事駐屯地から羈糜府まで—劉仁軌と扶餘隆を中心として

3.1 熊津都督を担任した劉仁軌

龍朔三年（663）、百濟の叛乱を平定した後、高宗は劉仁軌に鎮守を任せ、孫仁師と劉仁願と共に帰国するよう詔した⁶。劉仁軌が劉仁願に代わって、百濟留守軍の実際の最高長官になった。

【史料二十】『資治通鑑』卷二〇一高宗麟德元年（664）冬十月：

冬，十月，庚辰，檢校熊津都督劉仁軌上言：「……。」

ここでは劉仁軌が麟德元年（664）十月の段階で熊津都督とある。しかし、劉仁軌が熊津都督を担任したのはこの前であろう。

【史料二十一】『冊府元龜』卷三五八「將帥部・立功」一：

初，仁軌將發帶方州，謂人曰：「天將富貴此翁耳。」於州司請『曆日』一卷并七廟諱，人怪其故，答曰：「擬削平遼海，頒示國家正朔，使夷俗尊奉焉。」至，果以軍功顯，正除帶方州刺史，又檢校熊津都督，總知留鎮兵馬事。

【史料二十二】『冊府元龜』卷四二九「將帥部・守邊」：劉仁軌為帶方州刺史，代劉仁願為熊津都督，率兵鎮守，漸營屯田，積糧無士，以經略高麗。

この史料によって、劉仁軌が帶方州刺史に任命された時に、熊津都督も任命したことが分かる。しかし、その職事は劉仁願が離れた後、劉仁軌が管掌すべきであった。

3.2 軍事駐屯地から羈糜府へ—扶餘隆と羅、済の会盟

3.2.1 扶餘隆と羅、済の会盟

唐朝は高句麗に対する戦略が変わった後、百濟を南部戦線にするために力を尽くした。しかし、その頃、百濟の鎮守軍はまたその故地の叛乱のため、力を消耗することができない。百濟の故地に安定がもたらされた場合、銃後が安定する効果を期待でき、以降の物資の供給も望めた。このような情勢において、麟德元年十月に、劉仁軌は高宗に上書した。それは情勢を分析し、後顧の憂いがないために、前百濟の太子扶餘隆を熊津都督として、百濟の事務を扱うことを推薦したものであった。

【史料二十三】『新唐書』卷一〇八劉仁軌伝：

（麟德元年十月）仁軌具論其弊，請加慰賚，以鼓士心。又表用扶餘隆，使綏定餘眾。帝乃以隆為熊津都督。

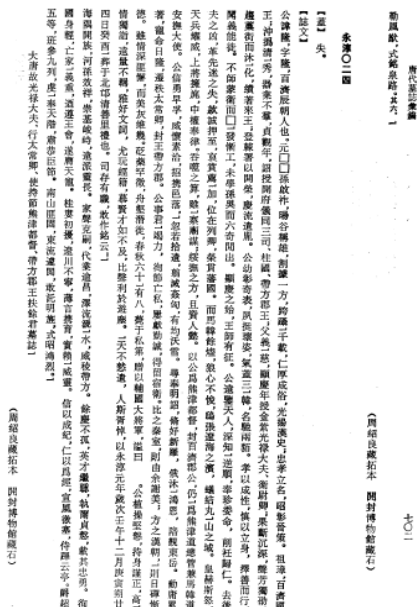


図1「扶餘隆墓誌銘」⁷

麟德二年（665）八月，熊津都督扶餘隆と新羅王金法敏が熊津城に会盟した。

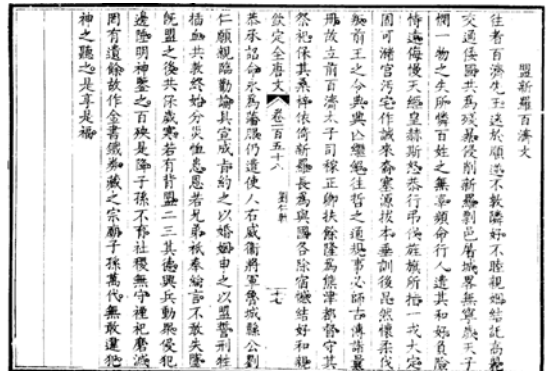


図2『全唐文』卷一五八劉仁軌「盟新羅百濟文」

盟文には唐朝が百済の故地を安定させる意図と新羅を制限することが明らかにみえる。これは唐朝が有利な南部戦線を構築するため、あるいは銃後を安定させるため、このような挙動に出たのであろう。この頃、百済の勢力が大体瓦解し、新羅が百済の故地を蚕食していたからである。この会盟は唐の直轄の領域、即ち熊津都督府の所轄と新羅の所轄を決めたものであり⁸、また、熊津都督府の羈縻の性格を明確にあらわしたものである。

熊津都督府のこの後の状況は、史料には記載され

ない。元の管轄地区はあらかじめ新羅の手中におち、都督府は有名無実になったと推測される⁹。儀鳳元年(676)、唐朝は熊津都督府を建安故城に移して、安東都護府に従属させ、百済の遺民を置いた機構を再建、羈縻政策を続けようとした。しかし、唐朝に任命された扶餘隆はこの任務を全うすることがなかったようだ。彼は故地へ帰る勇気がない¹⁰。黄清連は彼の墓誌によって、故国へ戻らず、高句麗から中国に逆戻りして、洛陽で高宗に仕えた、と推測している¹¹。

【表 1】扶餘隆行止表

時間	事件
顯慶五年(660)十一月	俘虜として、扶餘義慈と東都洛陽の則天門にて高宗に拝見した。
龍朔三年(663)八、九月間	別將として、水軍と糧船を將し、唐朝の百済叛乱を平定した白村江と周留城の戦役に参加した。
麟徳元年(664)十月	劉仁軌の推薦により、熊津都督として、百済の故地に赴き、餘眾を招輯した。
麟徳二年(665)八月	百済の代表として、唐朝が主持した羅、済の会盟に参加した。
乾封元年(666)二月	司稼正卿として、少牢の奠をとり、孔廟に祭孔した。
儀鳳二年(677)二月	熊津都督に再任され、また帶方郡王をとなり、本蕃に帰り、百済の餘眾を安輯と令した。

3.2.2 安東都護府について

總章元年(668)十二月、唐朝は高句麗に安東都護府を置いた¹²。

安東都護府は高句麗と百済の故地に置かれ羈縻府州を統轄し、それらの酋長等と協力して、その地を治し、鎮守、安輯などの役割を果たした¹³。しかし、新羅の蚕食から、安東都護府は移転された。上元三年(676)二月、「甲戌、徙安東都護府於遼東故城；先是有人任東官者，悉罷之。徙熊津都督府於建安故城；其百濟戸口先徙於徐、兗等州者，皆置於建安」¹⁴。儀鳳二年(677)二月、「以工部尚書高藏為遼東州都督，封朝鮮王，遣歸遼東，安輯高麗餘眾；高麗先在諸州者，皆遣與藏俱歸。又以司農卿扶餘隆為熊津都督，封帶方王，亦遣歸安輯百濟餘眾，仍移安東都護府於新城以統之」¹⁵。

安東都護府と熊津都督府の撤退は、唐朝による高句麗の南部と百済の故地の経略をやめることを物語る¹⁶。新羅はその地を合併して、その大同江の南部の三韓本土を統一する目標を達成した¹⁷。

4. おわりに

顯慶五年(660)に初置された熊津都督府は羈縻府であり、百済の酋長を都督として、王文度が都統を担任し、百済の故地を統轄、鎮守、監護した。彼が卒した後、劉仁願がその職を引き継いだ。龍朔二年(662)七月に、劉仁願は熊津都督を改称し、熊津都

督府の性格は羈縻府から唐朝の軍事駐屯地へ変わった。龍朔三年九月から十月になって、劉仁軌が熊津都督を担任し、高句麗を攻める準備のため、百済の故地を経営した。麟徳元年(664)十月、劉仁軌は前百済の太子扶餘隆を熊津都督として、百済の故地を安定させるために推薦した。熊津都督府が羈縻の性格に逆戻りしたといえる。それを麟徳二年八月の羅・済の会盟にて明確にした。咸亨三年(672)、熊津都督府とその所轄は大体新羅の手中におち、都督府は有名無実になったのであろう。儀鳳元年(676)、唐朝は熊津都督府を建安故城に移して、安東都護府に従属させ、百済の遺民を置いた機構を再建、羈縻政策を続けようとした。

7世紀の東アジア地域は、それぞれの勢力が競い合い、複雑な国際情勢にあったが、なかでも唐朝と朝鮮半島の関係は重要なものであった。熊津都督府とは、唐朝と新羅が協力して百済を亡ぼしたのち、唐朝が百済の故地に建てた五つの都督府のひとつであり、半島情勢において重要な役割を演じた。その発展の始末はその時代の情勢の変化を反映したものといえる。熊津都督府は唐朝の朝鮮半島に対する政策を直接の執行者であり、その頃の情勢に重要な位置を占めた。そのため、熊津都督府に関する研究は、その前後の東アジアの国際関係の発展をより深く理解するために、有益な考えを提供することは言を俟たない。

【表 2】熊津都督府年表

時間	治所	長官	事件
顯慶五年 (660)	熊津	王文度(都統), 百濟會長(熊津都督, 具體人物不詳)	蘇定方が百濟を平定、熊津等五つの都督府を置いた。王文度が卒し、劉仁願が泗泚城を守った。
龍朔元年 (661)	熊津	劉仁願(都護)	百濟の反軍が劉仁願を泗泚府城に囲み、劉仁軌が檢校帶方州刺史とし、王文度の眾を將し、新羅兵と仁願を救った。
龍朔二年 (662)	熊津	劉仁願(都護, 熊津都督)	劉仁願、劉仁軌が熊津の東に百濟を破り、真岷城を抜いた。
龍朔三年 (663)	熊津	劉仁願(熊津都督)、劉仁軌(檢校熊津都督)	劉仁願、劉仁軌、孫仁師等が白江に百濟の餘眾と倭兵を破り、周留城を抜いた。孫仁師、劉仁願が帰り、劉仁軌が鎮守となった。
麟德元年 (664)	熊津	劉仁軌(檢校熊津都督)、扶餘隆(熊津都督)	劉仁軌が百濟の故地を経略し、百濟の事について高宗に上書した。劉仁願を派遣し、舊鎮兵を代えて、仁軌が帰ると勅が出た。仁軌が帰れないと上言、扶餘隆を熊津都督に推薦した。
麟德二年 (665)	熊津	扶餘隆(熊津都督)	扶餘隆と金法敏が熊津城に会盟。劉仁軌と新羅、百濟、耽羅、倭国等の使者が唐に帰り、泰山を会祠した。
乾封元年 (666)	熊津	劉仁願(留守軍長官)	高句麗、内乱。唐が高句麗に出兵した。
乾封二年 (667)	熊津	劉仁願(留守軍長官)	劉仁願が百濟の守軍を領し、新羅兵を督し、高句麗を征した。
總章元年 (668)	熊津	劉仁願(留守軍長官)、劉仁軌(熊津道安撫大使、留守軍長官)	劉仁軌が遼東道安撫副大使、遼東行軍副大總管として、熊津道安撫大使を兼し、高句麗を征した。劉仁願を姚州に流した。九月、高句麗を平定した。
總章二年 (669)	熊津	劉仁軌(留守軍長官)	「李勣奏報」。熊津都督は、百濟の女を新羅の漢城州都督朴都儒に嫁がせた。
咸亨元年 (670)	熊津	不明	唐朝が遼東の地を州県に組み入れた。新羅が「疑百濟殘眾反覆」、「於熊津都督府請和、不從」、「知謀我(新羅)」を口実とし、百濟を攻め、八十二城を奪った。
咸亨二年 (671)	熊津	不明	新羅は百濟に出兵、侵し、熊津の南に戦った。薛仁貴が新羅王に書を致した。文武王が返信をした。
咸亨三年 (672)			新羅は熊津都督府に司馬彌軍等を派遣、罪を乞う。熊津都督府とその所轄は大体新羅の手中に入った。
咸亨四年 (673)			李謹行が瓠芦河の西に高句麗の叛者を破った。その餘眾が全て新羅に奔走した。
上元元年 (674)			劉仁軌を雞林道大總管とし、新羅に出兵。
上元二年 (675)			劉仁軌が七重城に新羅を破り、兵を引いて帰った。李謹行を安東鎮撫大使とし、新羅の買肖城に駐屯して経略した。新羅が使者を派遣、謝罪。
儀鳳元年 (676)	建安	不明	熊津都督府を建安故城に移した。
儀鳳二年 (677)	建安	扶餘隆(熊津都督)	司農卿扶餘隆を熊津都督とし、帶方王に封じ、本蕃に帰り、百濟の餘眾を安輯にするよう令した。

注

- 劉統『唐代羈縻府州研究』、西安：西北大學出版社、1998年、21頁、171-174頁。
- 韓昇「論新羅の獨立」、『歐亞學刊』第一輯、北京：中華書局、1999年、54-55頁。
- 拜根興『七世紀中葉唐與新羅關係研究』、北京：中國社會科學出版社、2003年、148-176頁。
- 津田左右吉「安東都護府考」、『津田左右吉全集』第十二卷、東京：岩波書店、1964年、57-84頁；黃清連「從「扶餘隆墓誌」看唐代的中韓關係」、『大陸雜誌』第85卷第6期、1992年；等を参考。
- 拜根興『七世紀中葉唐與新羅關係研究』第七章「劉仁願的活動及行跡」、第148-176頁。
- 『資治通鑑』卷二〇一高宗龍朔三年九月條を参考。
- 周紹良主編『唐代墓誌彙編』永淳〇二四「扶餘隆墓誌銘」、第702頁。

8. 池内宏「百濟滅亡後の動乱及び唐・羅・日三国の關係」、『滿鮮史研究』上世第二冊、吉川弘文館、1950年、178-194頁。
 9. 津田左右吉氏の「安東都護府考」を参考（『津田左右吉全集』第十二卷、59頁）。
 10. 『資治通鑑』卷二〇二高宗儀鳳二年二月「初、劉仁軌引兵自熊津還」條曰：「時百濟荒殘，命隆寓居高麗之境。……高麗舊城沒於新羅，餘眾散入靺鞨及突厥，隆亦竟不敢還故地，高氏、扶餘氏遂亡。」
 11. 黄清連「從「扶餘隆墓誌」看唐代的中韓關係」、13頁。
 12. 『資治通鑑』卷二〇一高宗總章元年冬十月“李勣將至”條。九つの都督府は、新城州、遼城州、哥勿州、衛樂州、舍利州、居素州、越喜州、去旦州、建安州である。
 13. 池内宏「高句麗滅亡後の遺民の叛乱及び唐と新羅との關係」、『滿鮮地理歴史研究報告』第十二冊、東京：東京帝國大學文學部、1930年；津田左右吉氏の「安東都護府考」；劉統『唐代羈縻府州研究』；等を参考。池内宏「高句麗滅亡後の遺民の叛乱及び唐と新羅との關係」、『滿鮮地理歴史研究報告』第十二冊、東京：東京帝國大學文學部、1930年；津田左右吉氏の「安東都護府考」；劉統『唐代羈縻府州研究』；等を参考。
 14. 『資治通鑑』卷二〇二高宗儀鳳元年二月甲戌。その年の十一月に、儀鳳の年号を変えた。「先是有華人任東官者」には、「章：十二行本「任」下有「安」字；乙十一行本同；孔本同；張校同。」という校勘がある。
 15. 『資治通鑑』卷二〇二高宗儀鳳二年二月「初、劉仁軌引兵自熊津還」條。
 16. 唐朝の撤退の原因について、たくさん研究成果がある。例えば、陳寅恪『唐代政治史述論稿』下篇「外族盛衰之連環性及外患與內政之關係」、北京：三聯書店、2001年；岑仲勉『隋唐史』上冊、北京：中華書局、1982年；黄約瑟「武則天與朝鮮半島政局」、林天蔚主編：『古代中韓日關係研究』、香港：香港大學亞洲研究中心、1987年；韓昇「論新羅の獨立」；池内宏「高句麗滅亡後の遺民の叛乱及び唐と新羅との關係」；津田左右吉氏の「安東都護府考」；等を参考。
 17. 王小甫「新羅北界與唐代遼東」（『登州港與中韓交流』國際學術討論會論文集、2004年）を参考。
- 参考文献**
- 池内宏「高句麗滅亡後の遺民の叛乱及び唐と新羅との關係」、『滿鮮地理歴史研究報告』第十二冊、東京：東京帝國大學文學部、1930年。
- 「百濟滅亡後の動乱及び唐・羅・日三国の關係」、『滿鮮史研究』上世第二冊、東京：吉川弘文館、1950年。
- 鬼头清明『白村江——東アジアの動乱と日本』、東京：教育社、1986年。
- 津田左右吉「浪水考」、『津田左右吉全集』第十一卷、東京：岩波書店、1964年。
- 「三韓疆域考」、『津田左右吉全集』第十一卷。
- 「好太王征服地域考」、『津田左右吉全集』第十一卷。
- 「長壽王征服地域考」、『津田左右吉全集』第十一卷。
- 「真興王征服地域考」、『津田左右吉全集』第十一卷。
- 「羅濟境界考」、『津田左右吉全集』第十一卷。
- 「百濟战役地理考」、『津田左右吉全集』第十一卷。
- 「高句麗战役新羅進軍路考」、『津田左右吉全集』第十一卷。
- 「唐羅交戦地理考」、『津田左右吉全集』第十一卷。
- 「新羅北境考」、『津田左右吉全集』第十一卷。
- 「安東都護府考」、『津田左右吉全集』第十二卷、東京：岩波書店、1964年。
- 堀敏一『隋唐帝國與東亞』、韓昇編、韓昇、劉建英譯、昆明：雲南人民出版社、2002年。
- Best, Jonathan W., “Diplomatic and Cultural Contacts Between Paekche and China”, *Harvard Journal of Asiatic Studies*, 42:2(1982).
- Gardiner, K. H. J., “The Samguk-Sagi and Its Sources”, *Papers on Far Eastern History*, 2(1970).
- Pan Yihong, *Son of Heaven and Heavenly Qaghan: Sui-Tang China and its Neighbors*, Bellingham: Center for East Asian Studies, Western Washington University, 1997.
- 拜根興『七世紀中葉唐與新羅關係研究』、北京：中國社會科學出版社、2003年。
- 岑仲勉『隋唐史』上冊、北京：中華書局、1982年。
- 陳寅恪『唐代政治史述論稿』、北京：三聯書店、2001年。
- 都興智「唐政權與朝鮮半島的關係述論」、『史學集刊』、2001年第3期。
- 高明士『東亞教育圈形成史論』、上海：上海古籍出版社、2003年。
- 韓昇「唐平百濟前後の東亞國際形勢」、『唐研究』第一卷、北京：北京大學出版社、1995年。
- 「對外政策：七世紀的唐朝與高句麗」、『中國古代社會研究——慶祝韓國磐先生八十華誕紀念論文集』、廈門：廈門大學出版社、1998年。
- 「隋朝與高句麗關係的演變」、『海交史研究』、1998年第2期。
- 「論新羅的獨立」、『歐亞學刊』第一輯、北京：中華書局、1999年。
- 「唐朝對高句麗政策論析」、『海交史研究』、2000年第1期。
- 「百濟之役與東亞」、『亞洲研究集刊』創刊號『二十一世紀亞洲發展之路』、上海：復旦大學出版社、2004年。
- 「唐朝對百濟的戰爭：背景與性質」、『百濟文化』第32輯、2003年。
- 黄清連「從「扶餘隆墓誌」看唐代的中韓關係」、『大陸雜誌』第85卷第6期、1992年。
- 黄約瑟『薛仁貴』、西安：西北大學出版社、1995年。
- “Unfought Korean Wars: Prelude to the Korean Wars of the Seventh Century”, *Papers on Far Eastern History*, 22(1980).
- 「武則天與朝鮮半島政局」、林天蔚主編：『古代中韓日關係研究』、香港：香港大學亞洲研究中心、1987年。
- 「讀「曲江集」所收唐與渤海及新羅敕書」、『東方文化』第26卷第2期、1988年。
- 「兩唐書薛仁貴傳」、『第一屆國際唐代學術會議論文集』、台北：唐代研究學者聯誼會、1989年。
- 黄枝連『天朝禮治體系研究』中卷『東亞的禮儀世界——中國封建王朝與朝鮮半島關係形態論』、北京：中國人民大學出版社、1994年。
- 姜維東『唐麗戰爭史』、長春：吉林文史出版社、2001年。

姜維公『『三國史記』李勣奏報的真偽問題』、『長春師範學院學報』、2002年第1期。

蔣非非、王小甫等『中韓關係史』、北京：社會科學文獻出版社、1998年。

金毓黻『東北通史』、台北：樂天出版社、1971年。

康樂『唐代前期的邊防』、台北：台灣大學出版委員會、1979年。

黎虎『漢唐外交制度史』、蘭州：蘭州大學出版社、1998年。

劉統『唐代羅罽府州研究』、西安：西北大學出版社、1998年。

呂思勉『隋唐五代史』、上海：上海古籍出版社、1984年。

毛漢光『唐代墓誌銘彙編附考』第10冊、台北：中央研究院歷史語言研究所、1989年。

孫繼民『唐代行軍制度研究』、台北：文津出版社、1995年。

唐長孺『魏晉南北朝史論叢』、北京：三聯書店、1955年。

章群『唐代蕃將研究』、台北：聯經出版事業公司、1986年。

『唐代蕃將研究』續編、台北：聯經出版事業公司、1990年。

周一良『中外文化交流史』、鄭州：河南人民出版社、1987年。

こう たんたん／お茶の水女子大学大学院研究留学生 北京大学歴史学部博士課程